



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	「山を高み」は「山が高いので」か
Author(s)	江部, 忠行
Citation	国語国文研究, 150, 45-59
Issue Date	2017-09-11
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/89742
Type	journal article
File Information	Kokugokokubunkenkyu_150_45-59.pdf



「山を高め」は「山が高いので」か

江 部 忠 行

一 背景

ミ語法のうち、「…を…み」の形は原因や理由を表わすとされる。以下、これをヲ型と呼ぶことにする。小学館の『日本国語大辞典（第二版）』（二〇〇一）は「み」の項目に次の二つの意味をあげる。

① あとに「思う」「する」などの動詞が続き、感情の内容を表現する。

② 「〔名詞十を…み〕〔名詞…み〕の形で」原因・理由を表わして連用修飾語となる。…が…なので。…が…だから。

ヲ型の例をあげる。

一―一 若の浦に潮満ち来れば潟をなみ（乎無美）葦辺をさして鶴

鳴き渡る

一―二 梯立の 倉椅山を 嶮しみ（袁佐賀志美）と 岩懸きかねて 我が手取らすも 古事記歌謡六九

一―三 采女の袖吹きかへす明日香風都を遠み（乎遠見）いたづらに吹く 万〇一―〇〇五一

潮が満ちてきている、潟がない、鶴が移動する。山が険しいと言う、岩を掴めない、私の手を取る。采女の袖を吹き返す（註一）飛鳥の風、都が遠い、無駄に吹いている。そこに因果関係があるのは言うまでもない。上代人はこれほど単純な因果関係を説明するためミ語法という特別の語法を用いたのだろうか。現代語でも原因や理由をわざわざ述べるのは聞き手が容易に因果関係を推測できない場合に限られる。

一方、原因・理由を表わさないとされるミ語法がある。「を」がないものや「思ふ」「す」が下接するものである。これらを総称して非

ヲ型とする。では、なぜ、『日本国語大辞典』が指摘するように、「を」の有無で理由を表わす場合、表わさない場合があるのだろうか。三省堂の『時代別国語大辞典 上代編』（一九六七）にも「くろくミの形は後続文の内容に対して原因・理由を表す場合が多い」とある。

ミ語法の「み」は動詞連用形、形容詞語尾などの諸説があるが、動詞連用形と考える説に従うならば、因果関係を表わすとされるのは見かけ上の現象であると理解できる。次の例文の動詞連用形は因果関係を表わすだろうか。

一一四 教室の窓を割り、先生に叱られた。

一一五 先生に叱られ、教室の窓を割った。

右の二例は因果関係が示唆されうるが、次の二例は示唆されない。

一一六 山へ行き、柴を刈った。

一一七 鰻を食べ、ビールを飲んだ。

ミ語法の「み」が動詞連用形であれば、因果関係は構文にあるのではない。継起的に発生する事象の意味の関連性が示唆するだけである。

ミ語法が因果関係を表わすものでないとする指摘は既にある。村島祥子（二〇〇二）はヲ型だけを論じたものであるが、ミ語法を「ある動作をとる主体に形式的に指示の他動作をとらせて、その時その人（物）に限った対象の状態を表わす語法である」とし、その意味

を「現代語としては『主体には、AがBくて、動作。』の構文が意味の上で最も近く、実際多くの『ーヲーミ』語法をこの構文で統一的に理解することができるとする。それに従えば一一一の意味は「（鶴には）鴻がなくて『葦辺をさして鶴鳴き渡る』」となる。

しかし、「形式的に指示の他動作をとらせ（ること）」が自然言語の中に発生するだろうか。「もの」や「こと」や「言うのを聞く」などの「の」を形式名詞と呼ぶ場合があるが、本来は固有の意味があり、その意味が弱まったもの、あるいは失われたのである。ミ語法の「み」にも何らかの意味が上代や上代以前に存在したはずである。

ミ語法の「み」に「見」の字が当てられる例が多いことから、葛清行（二〇〇四）は「み」の語源を「見る」に求め、「例えば『山高み』（無助詞のミ語法）において、ミの内容は、『山高（し）』と言えるようなことがらであり、∴（中略）∴。一方、『山を高め』（ヲのミ語法）の場合は、判断の対象を『山を』と示し、それについての判断を『高』表現している」と述べる。つまり、「み」は「見る」由来のものであって、「山を高め」は「山を高しと見」という主格の判断を表わすとする仮説である。

因果関係がミ語法の本質でないとする点で本稿は両説に近いが、ミ語法の成立と意味については全く異なる仮説から出発する。

ミ語法に関する最近の考察は他に松浦清美（二〇〇〇）、大秦一浩（二〇〇一）、竹内史郎（二〇〇四）、青木博史（二〇〇四）、葛清行（二〇〇六）、竹内史郎（二〇〇八）などがある。それ以前の考察は山口佳紀（一九八四）とその引用文献を参照されたい。江戸時代からの研究史については林四郎（一九四七）に詳しい解説がある。

なお、本稿は「仮説と検証」という方法を用いる。この方法は自然科学では一般的だが、国語学では殆ど用いられてこなかった。そのため、ここで簡単な説明を行なう。

現代に上代語の母語話者はいない。そのような言語の未知の語の意味の推定には仮説的推論が用いられる。たとえば、上代語の「今は漕ぎ出でな」の「な」の意味を推定するとき、文脈や歌が詠まれたときの状況から判断して、「な」の意味を話し手の希望、決意、話し手から他者への勧誘、命令などとする仮説を立てる。次に、その仮説を他の「な」の用例に適用して、その用例の文脈や状況に適合するかどうかの検証を行ない、適合しない仮説は棄却される。この操作で棄却されなかった仮説がその語の意味として確定する。

検証の過程で修正が行なわれることがある。たとえば、動詞の主格の人称や発話の相手の人称などの場合分けを行い、意味が変わるとするような新たな仮説を付け加えることがある。しかし、仮説が複雑化すればその信憑性が低下する。広い範囲に一律に適応可能な仮説が新たに登場すれば、そちらが信憑性で優る。ただし、ここで言う信憑性は感覚的な判断であり、仮説が棄却されるには反証の登場を待たなければならない。

仮説的推論が行なわれるのは古典語の研究に限られない。自然科学の分野ではその誕生のときから行なわれてきた。それ以前の自然現象の説明は神学的な原理からの演繹であった。不確かな前提からの演繹を脱した段階が科学の誕生のときと言える。

仮説的推論は演繹的推論の逆とも言える。「甲ならば乙」という前提に基づき、前件の甲から後件の乙を推論するのが演繹である。そ

れに対して、この方法は後件の乙を満たす十分条件となる前件の甲を推論する。たとえば、熱があるという症状を後件として風邪に感染したという前件を推論する。しかし、前件の候補は一つと限られない。他の病気の可能性もある。それぞれの候補に付き当然現われる症状を調べることで検証が繰り返され、唯一棄却されなかった仮説が診断結果となる。演繹は前提が正しい限り推論が正しいことが保証されるが、仮説的推論は正しさが保証されない。後件を満たす前件の候補が網羅されているれば、この方法が導く結論は正しい。しかし、網羅されているという保証はどこにもない。風邪とよく似た症状でありながら、全く違う原因で起こる病気が将来発見されるかもしれない。今日正しいとされる自然科学の法則も、現時点で反証がないという理由で正しいと扱われているに過ぎない。

以下、第二節に仮定とその仮定に至った背景を述べ、第三節から第五節に仮説に基づく機械的で一律な現代語訳を示してその検証を行なう。

二 本稿の仮説

本稿は次の仮定からなる仮説を置く。その後に万葉集と記紀歌謡の用例からこの仮説の適否を検討する。

仮定一 「み」は上接する語が示す状態へ向かう変化を意味する。

仮定二 ヲ型の「を」は対格を示す格助詞である。

仮定三 「み」は自他両用の動詞である。

仮定四 他動詞の使用は受身の代用であり、目的は語りの視点の統一である。

二、一 仮定一について

現代語にも「痛む」「憎む」「楽しむ」などの形容詞語幹に四段の「む」が下接した動詞がある。この「む」の意味は、その形容詞が表わす状態の程度の増加と考えられないだろうか。つまり、「傷む」は痛さの程度が増すと解釈できる。これらはラ格をとる他動詞である。そこに「使役」や「許容」の意味が見てとれる。たとえば、「上司を憎む」は上司をしてその憎さの、「遊園地を楽しむ」は遊園地をしてその楽しさの、それぞれの程度を増加させる、あるいは、程度が増加するのを許容すると解釈できる。

形容詞を名詞化する語尾に「さ」と「み」がある。その違いは現代語の興味深い研究テーマのひとつであるが、十分に説明されていないようである。たとえば、伊藤たかね・松岡洋子（二〇〇二）は「さ」が下接した名詞を「純粹な抽象名詞として、状態・程度・性質をあらわす透明な意味をもつ」とし、「み」については「具体的なものなどをあらわすことが多い」と述べ、次の例を挙げる。

〈場所〉高み、深み

〈感知される実体〉かゆみ、痛み、臭み、苦み

〈形〉丸み

その上で、「このように「み」形名詞の意味は、基体形容詞の意味

の影響を受けて特殊な意味をもちやすいために、予測がむずかしい。このような意味の特殊化は、語彙化され、レキシコンにリストされる語形成の特徴である」と述べる。

しかし、この「み」を程度の増加の具現化と見ると、本稿で述べた「痛む」などの意味と統一して理解できる。すなわち「み」が付いた形は全体の中で他と、あるいは時間経過の中で以前と比較して形容詞の表わす意味の程度が増している部分である。地形の中で「高み」や「深み」は他より高さや深さが増加している部分である。時間の経過に伴う状態の遷移の中で「痒み」や「痛み」は痒さや痛さが増加している状態、あるいは現われている状態である。「臭み」や「苦み」は臭さや苦さが食材の中で増加あるいは出現している個体（食材を集めたに見た場合）または部位（一つの食材を見た場合）である。形状の「丸み」は丸さが、他の個体と比較してあるいはその個体の中で、増加または出現している個体あるいは部位である。

本稿は「痛む」「楽しむ」などの形容詞を動詞化する語尾の「む」や形容詞の名詞化語尾の「み」をミ語法の末裔と見る。また、「広める」「高まる」などの「める」「まる」も同様と考える。

時代を遡ると、中古には「赤む」「白む」「とよむ」「休む」「和む」「静む」などの四段活用 of 自動詞が見られる。対応する下二段活用 of 他動詞は一部が上代の文献にも観察されている。これらはいずれも上接する形容詞語幹が表わす性質へ向かう変化、あるいはその程度が増す変化を意味する。

形容詞から派生した動詞のうち、上代に現れるものについては、中古のものと別とする意見がある。山口佳紀（一九八四）は上代の

マ行四段動詞として「いふせむ」「うべなむ」「うむ」「かしこむ」「にくむ」「めぐむ」「をしむ」をあげるが、その意味を「…と思う」「…がる」とする。また、マ行下二段動詞の「かたむ」「きよむ」「ひろむ」「ふかむ」「やすむ」の意味を上接する形容詞語幹が表わす性質へ向かう変化とする。形容詞を同論文は四分類して、性状形容詞（赤し、高し）、評価形容詞（怪し、正し）、感覚形容詞（痛し、熱し）、感情形容詞（悲し、嬉し）とする。分類の基準は、把握対象が前者では外的状態、後二者では内的状態であり、それぞれについて把握態度が客観的か主観的かである。その上で、性状形容詞（外的状態を客観的に把握するもの）のみが変化を表わし、他の三種類（対象が内的または態度が主観的）は「…思う」「…がる」であるとする。形容詞を意味の上から分類する試みは、ミ語法に関連するものに限定しても、村島祥子（二〇〇二）、竹内史朗（二〇〇四）、青木博史（二〇〇四）、葛清行（二〇〇六）などにも見られる。

しかし、「山が高い」ことは客観的で、「遊園地が楽しい」ことは主観的だろうか。高いことがその山の属性であるならば、楽しいことも属性であろう。逆に、遊園地が楽しいことが話し手の主観的判断であれば、山が高いことも主観的判断である。同じ山を別な話し手は低いと判断するかもしれないし、その遊園地を誰もが楽しいと判断することもあるだろう。

形容詞から派生したと考えられるマ行四段動詞は、上代のもものも含めて、その形容詞が示す状態へ向かう変化を意味すると本稿は仮定する。

英語の形容詞には、そのままの形であるいは接尾語 *-y* を付加し

た上で状態の変化を表わす動詞となるものがある。レビンとホバブ（一九六六）が大量にあげる例からいくつかを示せば、*'narrow' pale' broaden' deepen* などである。レビンとホバブはこのような脱形容詞的（*deadjectival*）な自他両用動詞が英語に多いことを例にあげ、そのような形容詞は局面階層（*stage-level*）の述語、つまり、ある個体の一時的な状態を表わす述語であることから外部使役（*external causation*）が可能であり、そのために他動詞化されやすいと説明している（註二）。英語で起こる現象が日本語でも必ず起こるとは言えないが、起こりうるとは言える。局面階層の形容詞が動詞化されるとすれば、一番単純な意味は上接する形容詞語幹が表わす性質へ向かう変化であると考ええる。

二、二 仮定二について

近藤泰弘（一九八〇）の考察に従い、ヲ型の「を」を間投助詞と見る説は除外したい。仮定二に異論は少ないと思う。前節で述べた村島（二〇〇二）や葛（二〇〇四）もヲ型の「を」を対格の指標と見ている。

しかし、この「を」が自動詞の主格と他動詞の対格を表わすとする説がある。ポビン（一九九七）は上代語に分裂能格性（*split ergativity*）があったと仮定する。

能格性は格の用法から見た言語の特性の分類のひとつである。この性質は仮定四の理由の説明にも使用するのでやや詳しく説明する。ディクソン（一九九四）の用語を用いて、他動詞の主語をA、他動詞の目的語をO、自動詞や述語形容詞の唯一の項をSとする。

現代日本語はAにガ格を、Oにヲ格を、Sにガ格を用いる。ガ格が主格であり、ヲ格が対格である。このような言語の性質を対格性と言う。これに対して、Aに能格(ergative)を用い、OとSに絶対格(absolutive)を用いる言語の性質を能格性と言う。ディクソン(一九九四)によると、どの言語にも他方の性質が多少ともあると言う。両者の性質が一つの言語で規則的に使い分けられる場合を分裂能格性と言う。具体的には、Sに用いる格が対格性言語のようにAあるいは能格性言語のようにOと分裂(split-S)する。分裂はSの名詞句階層(註三)や自動詞が使われるのが主節か従属節か、時制、相性(aspect)によって変わるが、特に自動詞の表わす行為が能動的な時にA、受動的な時にOと分裂する場合を活格性(activity)と呼ぶことがある。ポピン(一九九七)の言う分裂能格性はこの活格性である。さらに同じ行為が意志的に行なわれたか、無意志的に行なわれたかで起るSの分裂を流動(fluid-S)と呼ぶ。例えば「転ぶ」行為が意志的に行なわれた場合はAを、無意志的に行なわれた場合はOを用いる。

ポピン(一九九七)は上代語では「い」が能格であり、「を」が絶対格であるとした。ただし、用例の殆どがミ語法であり、その他は「…をありと聞く」のような現代日本語にもある現象である。特に稿者が重視したいのは、有標の絶対格が世界のどの言語にも確認されていないというディクソン(一九九四)が指摘する事実である。同書は印欧祖語が能格性言語だったとする仮説をその理由から否定している(註四)。

二、三 仮定三と仮定四について

ミ語法の「を」が対格を表わす格助詞であれば、「み」は他動詞あるいは自他両用動詞である。現代日本語で自他両用のものは「ひらく」と「じる」「ます(増)」など少数に限られる。しかし、漢語を語幹とするサ変動詞の場合は別である。小林英樹(二〇〇四)は「現行の一般国語辞典においてサ変動詞として用いられているものを集録した」とある北條正子(一九七三)から三四六語の自他両用の二字漢語動詞を採取している。和語に自他両用動詞が少ない理由は、四段活用対下二段活用、ラ行四段活用対サ行四段活用という明示的な自他の区別が発達したためであろう。例えば「付く」と「付ける」、「抜ける」と「抜く」、「成る」と「為す」などである。そのような区別がなかった時代の日本語の動詞は、現代語の漢語動詞がそうであるように、自他の区別に寛容であったと考える。

「山を高み」は「山を高め」であると述べる二つの反論が予想される。一つは「山の高さが変わるか」である。しかし、「服が小さくなった」という表現は現代語でもなされる。服が縮んだのではない。子どもが成長したか、大人が肥満したかである。山の絶対的な高さは変わらないが、見掛けの高さは変化する。山に近付けば高く見え、離れば低く見える。場所に応じた変化である。現代語の「高める」の「める」や「高まる」や「まる」は時間的な変化しか表わさないが、ミ語法の「み」は時間的な変化だけでなく、距離の違いや対象の違いによる変化をも表わしたと考える。二、一節で述べたように、現代語の山の「高み」や海の「深み」の「み」がそうである。

服が小さくなる変化は、洗濯後であれば「服が縮んだ」と言う。

「小さくなった」のような形容詞主体の表現は二つの時点で形容詞が表わす状態の変化に注目し、「縮んだ」のような動詞主体の表現は動詞が表わす連続的な過程に注目する。ミ語法の表わす変化は連続的なものではなく、他のある時点やある場所、ある個体との比較による変化を表わすものであろう。

もう一つの反論は「それは高まったのであって、高めたのではない」であろう。次の動作は他動詞で表わされるが、意志的なものだろうか。

二一 立ち躍り足すり叫び伏し仰ぎ胸打ち嘆き手に持てる我が子飛ばしつ… 万〇五—〇九〇四

二二 時はしもいつもあらむを心痛くい行く我妹かみどり子を置きて 万〇三—〇四六七

このような現象を柳田征司（一九九四）は「意志動詞の無意志的用法」と呼び、二一を不注意事態表現、二二を不可避事態表現に分類した。山上憶良が子供を落としたのは不注意であるが、大伴家持の亡妻が子供を残したのは意志でも不注意でもない。

現代語の例をあげる。意志的動作、不注意動作、不可避的動作のそれぞれに使われる動詞に「なくす」がある。

二二三 作業の無駄をなくし、社内で表彰された。

二二四 切符をなくし、予定の列車に乗れなかった。

二二五 両親をなくし、祖父母に育てられた。

二一三は何らかの意志的な行為を行ない、無駄がない状態を発生させた。二一四はすべき行為を行なわなかったために、切符がない状態が発生した。二一五は意志的な行為を行なったのも、すべき行為を行なわなかったのでもないが、両親がない状態が発生した。これらの例文の「をなくし」を「がないので」と入れ替えても意味が通ることに注意されたい。もしも、「なくし」の意味が後世に忘れられたとすれば、その時代の研究者はこれを因果関係を表わす表現と見るかもしれない。

二一五の「両親をなくし」は「両親がなくなり」としても全く同じ意味である。また、次の例も主格は無意志である。「影響」「被害」「面目」は構文的には他動詞の対格であるが、意味的には主格である。

二一六 影響を受けた。

二一七 被害を蒙った。

二一八 面目を失った。

では、なぜ他動詞を受身のように使うのか。次の文を考察する。

二一九 太郎（S）が行き、太郎（A）が鬼（O）を退治した。

二二〇 太郎（S）が行き、鬼（O）を退治した。

二二一 太郎（S）が行き、鬼（A）が太郎（O）を退治した。

二二二 太郎（S）が行き、鬼（A）が退治した。

二二三 太郎（S）が行き、鬼に退治された。

現代日本語で二一九はしつこく響く。通常は二一九を二一〇と表現するが、二一一を二一二と言い替えることはできない。二一九が言えて、二一二が言えないのは現代日本語が対格性言語だからである。SとAに主格であるガ格を使う。そのために省格が可能となる。一方、能格性言語は二一〇のような省格ができない。Sに絶対格を、Aに能格を使うからである。しかし、SとOに同じ絶対格を使うため、二一二の表現は可能で自然である。格の現れ方は表面的なことであって、本質的な違いは対格性言語が出来事を主語の立場で語り、能格性言語が目的語の立場で語る点にある（註五）。対格性言語が二一一の表現からOを省略する場合は二一一三の受身の形を使ってOをSに変換する。これと同じことが能格性言語にもあり、二一九からAを省略する場合は逆受身を使ってAをSに変換する。両言語に受身や逆受身が発達したのは、語りの視点を変えないためであろう。

ヲ型の「み」が他動詞であるとすれば、そうであると本稿は仮定するが、その理由はミ語法が盛んに用いられていた時代に受身が未発達であり、その代用として使役形（他動詞）が用いられたものと考ええる。放任」とされる使役助動詞の用法は受身に近いものである。中世の軍記物の「馬を射させて」の表現は「強がり」でなく、受身の代替表現であろう。語りの視点を統一すれば聞き手が理解しやすい。文脈の中で変わるのはまだしも、文の中で視点が変化しては状況の把握の妨げになる。そのための方法の一つは使役助動詞や他動詞の使用、もう一つは自発助動詞の使用であろう。両者が勢力を争う段階を経て、もっぱら後者が用いられる近世や現代の受身表現が

成立したものと推察する。

ここで、ボビン（一九九七）を継承する竹内（二〇〇八）があげる例文を考察する。

二一四　ますらをと思へる我を（吾乎）かくばかりみつれにみつれ（三礼二見津礼） 片思をせむ（片念男貴） 万〇四一〇七一九

「を（乎）」がOの指標であれば、「みつれ」は他動詞であり、Aは詠者である。「を」が接統助詞であれば「みつれ」は自動詞であり、Sは詠者である。「せむ」のAは詠者である。対格性言語ではSとAが同一の格であるから、いずれも語りの視点は動かない。もしも、能格性言語であればSとOが同一の格であるから、語りの視点は「我」から「片思」に移動する。しかも、「せむ」のAが明示されていないため、能格性言語の話者から見た二一四は対格性言語の話者から見た二一二に相当する。とすれば、二一四は上代語の対格性を示唆する。

ヲ型を使用する目的が語りの視点の統一であれば、ミ語法が表わす状態の変化と主格の動作が継起する局面で使われる。したがって、そこに因果性が現われやすい。一方、非ヲ型は視点の変化があるため、両者の関連性が弱く、必然的に因果関係が希薄になる。

次節で用例の検討を行なうが、語りの視点を反映させるため、口語訳はヲ型を「…を（無意志的に）…の状態にしてしまつて」または「…に…の状態になられて」、非ヲ型は自動詞と考えられるときに限り「…が…の状態になつて」とする。非ヲ型の「み」には他動詞

と解釈されうるものがあつた。

ミ語法が表現する変化が時間的なものである場合、機械的に口語訳しても理解しやすいが、空間的、つまり位置や個体に応じた変化の場合、現代語に対応する表現がない。しかし、直訳的な口語訳が難しいことは上代語にそのような意味がなかった根拠とはならない。現代語の形容詞語尾の「み」において、「高み」や「深み」が位置的な変化、「温かみ」や「旨み」が個体間あるいは種別間の変化を意味することからも、上代語のミ語法がそのような変化をも包含するものであつたことが窺われる。

三 ヲ型のミ語法の検討

現代語にはミ語法の「なみ」の口語訳に最適な「なくす」という動詞がある。まず、「なみ」を含むヲ型を検討する。この場合は機械的に「をなみ」を「をなくして」と置き換えて口語訳できる。

三、一 「をなみ」型の検討

三一 若の浦に潮満ち来れば潟をなみ（乎無美）葦辺をさして鶴鳴き渡る

万〇六一〇九一九
解釈 若の浦に潮が満ちて来ているので鶴が干潟をなくして葦辺を目指して鳴き渡っている。

このように解釈すると、この歌の描写が静止した場面でなく、「潮満ち来れば」とあいまって動的な表現であることが理解される。

三二 ますらをの心はなしに手弱女の思ひたわみてたとほり我れはぞ恋ふる舟楫をなみ（雄名三）
万〇六一〇九三五

解釈 益荒男の心はなくて手弱女のように思い乱れてしまい真つ直ぐに進めない状態で私は恋している、船舵をなくして。

益荒男であつたときには舵があつたから思い乱れることもなかった。今はその舵をなくしてしまつてゐる。過去と現在を比較した変化を詠者は表現しなかったのではないだろうか。

三三 玉の浦の沖つ白玉拾へれどまたぞ置きつる見る人をなみ（乎奈美）
万五一三六二八

解釈（妻が生きていたときに）沖の白玉を拾つたがまた置いた、見る人（妻）をなくして。

妻の死からそう日が経っていないのだから、「ない」という静止した状態を表現するより「なくなつた」という変化を詠者は意識するであろう。詠者が「見る人なけく」や「見る人ぞなき」ではなくミ語法を用いた理由もそこにあると考える。

三四 夕霧に千鳥の鳴きし佐保路をば荒しやしてむ見るよしをなみ（乎奈美）
万二〇一四四七七

解釈 「夕霧に千鳥の鳴きし」佐保路を荒らしてしまうのだろうか、見る理由をなくして。

智努女王が生きていたころは訪ねるために佐保路を何度も通つた。しかし、今となつてはその理由がなくなつてしまつた。とすれば、自分が通わないことで結果として佐保路を荒らしてしまうことになるのだろうか。詠者はそのように感じたかと解する。やはりこの歌も智努女王の死という詠者にとって重大な事象の前後の変化を表

現するものであろう。

三一五 思ひにしあまりにしかばすべをなみ（平無美）我れは言ひてき忌むべきものを
万一二二九四七

解釈 思ひが強すぎたので「すべ」をなくして、私は言つてしまつた、慎むべきなのに。

普段はあつたはずの「すべ」をその時は失つていた。普段の自分と比較した変化であろう。単に「すべ」がないであれば、普段もそうなのかと思われてしまう。それが事実であるか否かは別にして、人間の心理としては一時的に「すべ」を失つていたと表現したいはずである。

三、二 他のヲ型の検討

「なみ」以外のヲ型の場合は現代語に「なくして」のような便利な語彙がない。変化を表わす他動詞を用いて機械的に口語訳するが、主格の意志を薄めるために他動詞に加えて「しまふ」を用いることにする。第二候補として括弧内に受身形の機械的な口語訳を付すこともある。

三一六 采女の袖吹きかへす明日香風都を遠み（平遠見）いたづらに吹く
万〇一〇〇五一

解釈 采女の袖を吹き返す（ことが実証されている）飛鳥の風が都を遠くしてしまつて無意味に吹いている。

遷都による時間的な変化を詠者はミ語法で強調したかったものと考ええる。

三一七 人言を繁み（人事乎繁美）言痛み（許知痛美）おのが世に

いまだ渡らぬ朝川渡る

万〇二一〇一一六
解釈 人の噂を頻繁な状態にしてしまつて、言葉が辛い状態になつて、私の人生で未だ渡らないでいる朝の川を今渡っている（これから渡る）。

三一八 我が背子が宿の橘花をよみ（平吉美）鳴く霍公鳥見にぞ我が来し
万〇八一四八三

解釈 私の好きな人の家の橘、その花を気に入つた状態にしてしまつて鳴いているホトトギスを見に私が来ました。

三一九 さを鹿の妻呼ぶ秋は天霧らふしぐれをいたみ（平疾）さ丹つらふ黄葉散りつつ…
万〇六一〇五三

解釈 さ：秋には空に霧を立たせ続ける時雨を強めてしまつて（時雨に強くなられて）赤く染まつた紅葉が散りながら…。

三二〇 夜を長み（平奈我美）寐の寝らえぬにあしひきの山彦響めさを鹿鳴くも
万一五三六八〇

解釈 夜を長くしてしまつて（夜に長くなられて）寝られないときに山彦を響かせて鹿が鳴いている。

牡鹿が雌鹿を求めて鳴く秋になり夜が長くなったという季節の移り変わりを詠者は表現したのであろう。

三二一 上つ毛野阿蘇山つづら野を広み（平比呂美）延ひにしものをあぜか絶えせむ
万一四一三四三四

解釈 「上つ毛野阿蘇山つづら」が野を広くしてのびているものをどうして絶えさせよう。

時間的なものなのか他の場所との比較なのかは不明だが、草木の生えた部分の面積の増加であらう。

三——二 くはし妹に鮎を惜しみ（遠惜）くはし妹に鮎を惜しみ（矣惜）投ぐるさの遠ざかり居て 思ふそら安けなくに嘆くそら安けなくに
万 一三——三三〇
解釈 美しい妻に対して鮎を惜しくしてしまつて（鮎に惜しくなられて）……。

これはそのまま「鮎を惜しみ」が一番相応しく感じる。本稿の解釈では現代語の「惜しむ」の意味は「惜しさの程度を増加させる、あるいは、程度が増加するのを許容する」である。時間的な変化であればそれまで惜しくなかったものが惜しくなった意味、個体間の変化であれば他の人、例えば詠者から魚を買う人と比べて、妻に対しては鮎が惜しい意味と考える。いずれにせよ変化である。

三、三 ヲ型に「と」「か」の下接する場合

「み」に引用の「と」や疑問の「か」が下接する場合も変化の意味は変わらない。

三——三 梯立の倉椅山を嶮しみると（袁佐賀志美登）岩懸きかねて我が手取らずも
古事記歌謡六九

解釈 「梯立の倉椅山を傾斜が急な状態にしてしまつて（倉椅山に傾斜が急な状態になられて）」と岩を掴みかねて私の手を取る。

原因が疲労ならば時間的な変化、登るに従つて傾斜がきつくなるのであれば時間的かつ位置的な変化、他の山との比較であれば個体間の変化である。

三——四 倉橋の山を高みか（山乎高可）夜隠りに出で来る月の光

乏しき

万 〇三——〇二九〇

解釈 倉橋の山を高い状態にてしまつてか（山に高い状態になられてか）：月の光が乏しい。

「高み」の主格が月であれば、その夜の月の光の弱さの理由を擬人化して冗談交じりに詠つたものと考ええる。主格が詠者であれば「いつの間にか山が高くなつていたか」というやはり冗談交じりの表現である。

ある状態の変化は他の状態の変化を促す。しかし、因果関係はミ語法の本質でなく、変化という事象がしばしば必然的に伴う他の事象への波及のためである。以上、ここで検討したヲ型のミ語法は一律に変化の意味と解釈することが可能であつた。

四 非ヲ型のミ語法の検討

非ヲ型の「み」は「を」の省略がなければ自動詞である。自動詞と解釈できるときは機械的に「状態になつて」「状態が強まつて」と口語訳する。ただし、離れた場所に「を」がある場合や「を」の省略が窺われる場合もある。その場合は他動詞として訳す。

四——一 越の海の手結が浦を旅に見れば羨しみ（見者乏見）大和偲ひつ
万 〇三——〇三六七

解釈 旅人の身で「越の海の手結が浦」を見ると（手結が浦をして）人恋しくさせる状態を強めてしまつて、家族の住む大和を思いやつ

た。

これを他動詞と解釈したのは、現代語の形容詞から派生される「楽しむ」などの「：しむ」型の動詞が対格の「を」をとることによる。自動詞ととって「人恋しい状態が強まり」と訳しても伝える意味は同じであるが、語りの視点の統一を重視したい。

四一二 三諸の神奈備山にたち向ふ御垣の山に秋萩の妻をまかむと朝月夜明けまぐ惜しみ（明巻鶯視）あしひきの山彦響め呼びたて鳴くも

万〇九一―七六一
解釈：夜が明けようとするのを惜しい状態にしてしまつて山彦を響かせて（妻を）呼び立てて鹿が鳴いている。

これも同じ理由で無標の「明けまぐ」を対格と見たい。

四一三 一重山へなれるものを月夜よみ（月夜好見）門に出て立ち妹が待つらむ

万〇四一―〇七六五
解釈 山が一つ隔てているのに月夜を良い（明るい）状態にしてしまい門に出て（この明るさならば私が来るのではないかと）恋人が待っている気がする。

これも他動詞と解釈したが、自動詞だとしても意味が通することは言うまでもない。

四一四 吉野川行く瀬の早み（瀬之早見）しましこも淀むことなくありこせぬかも

万〇二一―〇一一九
解釈 吉野川の流れる瀬のように、（私たちの恋愛の進展が）速い状態になって（速まつて）少しの間も淀むことなくあつてくれないものか。

これは「瀬の」の「の」を主格の標識と考えた。

四一五 はねかづら今する妹がうら若み（妹之浦若見）笑みみ怒りみ付けし紐解く

万一一―二六二七
解釈 はねかづらを今している恋人の気持ちに幼い状態になって、（私は）笑つてみたり怒つてみたりして帯の紐を解いている。

「はねかづら」を付けたことによる精神状態の変化と考える。この場合の動詞の終止形は「今」があることから習慣相でなく進行相を表わすと考ええる。

四一六 思はぬに至らば妹が（妹之）嬉しひと（歡三跡）笑まむ眉引き思はゆるかも

万一一―二五四六
解釈：（私が来たことを）「嬉しい状態にしてしまつて」と微笑むであろう恋人の眉引き…。

この「之」を「が」と読んだ場合その「が」は「眉引き」に掛かると考える。

四一七 富人の家の子どもの着る身なみ（奈美）腐し捨つらむ絹綿らはも

万〇五―〇九〇〇
解釈 金持ちの家の子供たちのたくさんある着物を着るその体がない状態になって、腐らせて捨てると思われる高価な着物よ。

この「なみ」は子供の死を意味するものでなく、他の着物は着てくれる子供があるが、ある着物は着てくれる子供がない、という着物の個体間の変化であろう。

四一八 明日香の古き都は山高み（山高三）川とほしろし…

万〇三―〇三二四
解釈：飛鳥の古い都は山が（他の地方と比べて）高い状態になつて川が雄大である…。

四一九 …天離る鄙にしあれば 山高み（高美） 川とほしろし野を広み（乎比呂美） 草こそ茂き鮎走る夏の盛りと…

万 一七一四〇一一
解釈 …田舎なので（都と比べて）山が高くなっている、川が雄大である。（都と比べて）野を広くしてしまつて（野に広くなられて）草が繁り鮎が走る夏の盛りと…。

ヲ型の「広み」の対格は野、主格は草であろう。

五 「す」「思ふ」が下接するものの検討

「みす」の形は「知らにす」「生えす」「欲りす」などと同様、連用形しか現れない語形にサ変動詞を下接させ終止形の意味を表わすものと考えられるが、何故「知らぬ」「生ゆ」「欲る」の形の終止形が用いられなかったかの疑問への回答は容易でない。詳細な議論は別稿としたい。ここでは単純に他の活用形を補うためと仮定する。「み思ふ」の形は「：を」の状態にしてしまつてあれこれと思う」の意味と解釈する。語りの視点の統一が理由である。

五一一 絶ゆと言はばわびしませむと（和備染責跡）焼大刀のへつかふことは幸くや我が君 万 〇四一〇六四一

解釈（あなたが）別れると言え（私が別れを）やりきれない状態にしてしまつたらうと…。

五一二 相見まく欲しきがためは君よりも我れぞまさりていふかしみする（伊布可思美為也） 万 一二一三二一〇六

解釈 会いたいという目的は、あなたよりも私が強くて（あなたよりも私がその状況を）不安な状態にしてしまつています。

構文は「君よりも我れぞいふかしみする」に「まさりて」が挿入されたものであるが、その「まさりて」は「相見まく欲しきがためは」を受けると解釈した。ミ語法の意味はあなたと比べて私が「いぶかし」の状態の程度が強い、という人の個性間の変化と考える。

五一三 玉梓の道の神たち賄はせむ我が思ふ君をなつかしませよ（奈都可之美勢余） 万 一七一四〇〇九

解釈 …私が心配しているあの人をあなたにとつて好意的な状態にしてください。

五四一 さ百合花ゆりも逢はむと思へこそ今のまさかもうるはしみすれ（宇流波之美須礼） 万 一八一四〇八八

解釈 今後とも会おうと思つているからこそ今現在も（その人を）親近感を感じる状態にしてしまつています。

五一一 我妹子を相知らしめし人をこそ恋のまされば恨めしみ（恨三念 思へ） 万 〇四一〇四九四

解釈 私の恋人を紹介してくれた人を（その人のほうが）彼女を恋しいと思う気持ちが強いので、（その人を）恨みがましい状態にしてしまつてあれこれと思つている。

六 結論

「を」のある場合は因果関係を、ない場合は感情を表わすとされてきたミ語法だが、ミ語法の「み」の意味を「上接する形容詞語幹が

表わす性質へ向かう変化、あるいはその程度が増す変化」とする本稿の仮説を適用すると、両者を統一して解釈可能であることが確認できた。因果関係や感情はミ語法の構文にあるのでなく、表現される事象の関係が内包するものであった。不可解な「を」の使用も語りの視点の統一するための他動詞の無意志的用法の観点から説明できた。

本稿の仮説はミ語法の意味の解釈だけでなく、形容詞の名詞化語尾の「み」や形容詞から作られる「楽しむ」などの「しむ」の語尾を有する動詞の解釈にも有効であると考ええる。また、萬葉集や記紀歌謡の歌の意味が従来の解釈に比べて文学的に深まるとも稿者は考えるが、この点は主観に依存するので諸兄諸姉の判断に委ねたい。

注

註一 動詞終止形や連体形のこの用法を潜在能力でなく実証された能力を示すものと考ええる。

註二 レビンとホバブ（一九六六）の三、二節を参照。同書は himself 交替が他動詞の脱他動化（decausativation）で生じたとする。日本語に適用すれば他動詞の「戸（を）ひらく」が自動詞の「戸（が）ひらく」へ変化することである。この他にも、自己交替は自動詞から他動詞への変化とするもの、両方向の変化があったとするなど諸説がある。逆に言えば定説がない。

註三 ディクソン（一九九四）の四、二節を参照。主格になりやすさの順に名詞句を並べたものを言う。一人称、二人称、三人

称の代名詞、固有名詞、人、有情物、無情物の順である。同様の考えの初出はシルバーステイン（一九七六）である。ただし、詳細に見ると両者は違う。

註四 ディクソン（一九九四）の三、四節を参照。
註五 ディクソン（一九九四）の六、二節を参照。

引用文献

- 青木博史（二〇〇四）『ミ語法の構文的性格——古典語における例外的形式』『日本語文法』四（二）
- 有坂秀世（一九四〇）「シル（知）とミル（轉）の考」『国語と国文学』昭和十五年一〇月『国語音韻史の研究 増補新版』（一九五七年 三省堂）に収録
- 伊藤たかね・松岡洋子（二〇〇二）『語の仕組みと語形成』研究社
- 大森一浩（二〇〇一）「形容詞連用形の側面……萬葉集においてミ語法との関係から」『京都大学国文学論叢』六
- 小林英樹（二〇〇四）『現代日本語の漢語動詞句の研究』ひつじ書房
- 近藤泰弘（一九八〇）『助詞「を」の分類——上代』『国語と國文學』五七（二〇）
- シルバーステイン（一九七六）Michael Silverstein 1976, Hierarchy of Features and Ergativity. In Robert M. W. Dixon. (ed.), Grammatical Categories in Australian Languages, Humanities Press.
- 竹内史郎（二〇〇四）『ミ語法の構文的意味と形態的側面』『国語

學』 五五 (一)

竹内史郎 (二〇〇八) 「古代日本語の格助詞の標示域とその変化」『國語と國文學』 八五 (四)

葛清行 (二〇〇四) 「ミの世界」『國語国文』 七三 (一一)

葛清行 (二〇〇六) 「ミとミット」『國語国文』 七五 (一〇)

ディクソン (一九九四) Robert M. W. Dixon 1994, Ergativity, Cambridge University Press.

林四郎 (一九四七) 「『み』考」東京大学文学部国文学科『文学探求の言語学』 (一九七五年 明治書院) に収録

北條正子 (一九七三) 『品詞別日本文法講座 一〇 品詞論の周辺』 (明治書院)

ボニン (一九九七) Alexander Vovin 1997, On the Syntactic Typology of Old Japanese, Journal of East Asian Linguistics 6. 237-90.

松浦清美 (二〇〇〇) 「形容詞におけるミ語尾の文法性——引用と評価」『萬葉』 一七二

村島祥子 (二〇〇二) 「上代の「ミ」語法について」『國語と國文學』 七九 (二)

柳田征司 (一九九四) 「意志動詞の無意志的用法」『研究叢書七〇 中世国語論考』 (一九九四年 近藤政美編 和泉書院)

山口佳紀 (一九八四) 「ミ語法の成立」『論集 上代文学 第一三冊』 (笠間書院) 『古代日本語文法の成立の研究』 (一九八五 有

精堂) に収録

レビンとホバブ (一九六六) Beth Levin and Malka Rappaport

Hovav 1996, Unaccusativity: At the Syntax-Lexical Semantics Interface, The MIT Press.

辞書

『時代別国語大辞典 上代編』 (一九六七 三省堂)

『日本国語大辞典 (第二版)』 (二〇〇一 小学館)

(えへ たかゆき・アシル技研株式会社代表)